

東北大震災は原発問題をともなつて大きな禍根を残した。放射線という、見えないモノの恐怖は、世界中に発信され人間の驕りと愚かさを強烈に具現した。進歩した科学技術は、科学技術で解決しないことを、原発事故によって改めて知らされたのかもしれない。

地球に息づくすべての命、その先頭に立つ人間社会が数千年から成るとして、たかだか数十年の間に地球は見えないモノによって様々な問題を抱えてしまった。エルニーニョと呼ばれる海水の温度上昇など良い例だ。たった1℃の温度変化で生態系ばかりか地球規模の気象変動を起こしてしまう。それを引き起こした人間社会は、その影響を正しく理解することさえできないでいるのだ。

人は、ただただ哀しく、そして愚かしい。

『経済、経済、経済優先・イノベーション』と、自然に目を向けず叫んでいる。

良いも悪いも、見えないモノが溢れ出す時代になった。

氷河や永久凍土の溶解は海面上昇を生むだけではない。同時に大量の異種なガスを地下深くから放出させて、数万年も眠り続けてきた怪物を揺り起こそうとしているのだ。既に地球のあらゆる場所で猛威を振るう奇形の病原菌によってそれは証明されている。細菌学を専門とする研究者達はシベリアに現れたブラックホールを例に挙げ声を高めた。ホールは古代に生きたDNAが、新種のウイルスを生む温床となって生態環境まで変えてしまうだろうと・・・僅かに望みを持っていた学者達でさえ、手遅れた人間の英知ではもう後戻りできない・・・デイツピングポイントに達しているのではないかと警鐘を鳴らしている。

何故ならこうした環境変化の要因は、元を正せば人間の社会倫理が起因となったもので、経済優先がもたらす人的欲望が、増殖する菌の栄養源となっているからだと言った。

しかし、哀しく愚かしいことに多くの政治家達は深刻でないのだという。

良いも悪いも、見えないモノが溢れ出す時代になった。その危ない結末を見ようとしないうで、のうのうと生きる人達が愚痴ばかりこぼしている。

還暦同級会の温泉旅行を終えて、八王子にある私の会社が近いからと幼馴染み3人ばかり誘った。小中学校は福島県の会津盆地の真中にあつて、通う生徒は例に漏れず米農家の子供ばかりだったから、原発による米や果物の風評被害がいつも話題の中心になつてしまふ。

私の事務所で酒を飲みながらそのことで議論していたら、見えないモノには見えないモノで解決するしかないだろうと、M君がとかく話題になりがちな人工知能の有効性を持ち出した。近頃のビックデータとか、AIはプロ棋士に将棋で勝ったとか、VRだとか、気骨稜々たる慷慨家の話ぶりではあったが、彼も良くわかって話しているとは思えなかった。

自然が持つ複雑多様な性格性は、その全体の新陳代謝にあると私は思っている。ビックデータを元に合理性や整合性を追求しても無理だし、もうこれ以上手を加えてはいけなと思うのだ。地球と融合するという倫理に従い、何も付け足してはならないと思っっている。簡単なことだからそう言うのではない。自然を尊敬し、手を加えないことが如何に難しいか知っているからこそ、そう思うのだ。果たしてこれからの人間は、自然に手を加えないで自然の力を尊重することが出来るだろうか。

私は自然の見えないモノを幼い時から尊敬してものづくりをしてきた。そもそも私の会社は、私のものづくりから創業した会社で、開発した商品は自然観察を元に造られた物ばかりだ。しかし、隙間産業の最たるもので余りにも地味過ぎる。そして非常に特殊なものだから同級生に商品説明をするにも困っていた。

「Y君は、相変わらずだなー。昔とちつとも変わらないね」

「あれ？Y君、あの凧は？・・・」

事務所に飾ってあるカイト凧を見付けて、3人は手に取って懐かしいと言った。それからは幼年時代の古い思い出話に花を咲かせた。

私は小さい時から自然科学が好きで、物や現象を観察して夢見ることが好きだった。けれど科学者になろうとか、そうした学問を目指そうとか、特別考えることはなかった。ただ、自然現象の不思議さに魅力を感じるといろいろ妙なアイデアが湧いてくる。自然現象は見ようとしなければ決して見えない。また、見ようと思っても見えないモノもある。

その見えないモノを応用工夫して誰かを驚かしてやろうと思う。幼い頃から何か変わったものづくりをして、親や友達を面白がらせたり驚かすのが好きだった。単に、昆虫や魚など身近にいる生き物や植物が、それを教えてくれるようで面白がっていただけだ。そうした幼稚な実験やものづくりだけど、やっぱり成功もあるが失敗も多い。小さい時からずい分くだらぬ物も作ってダメにした。しかし、自慢できる物も少なくなかった。

父親は釣りが好きで、幼い私を連れ出して良く出掛けた。テンカラという釣りは、毛鉤を道糸に8本くらい付けてウキを一番先端に仕掛ける。それを川上から繰り返して流す簡単な釣りだ。父は主にバカハヤを釣る目的の釣り方だと言った。毛鉤は黒いナイロンのような毛で出来て、根元には光の反射でキラキラする小さく丸い玉が付いていた。父は日が落ちる夕方を魚の食事時と考えていたから、いつも夕方近くに出掛けた。やはり、日が落ちかけないと魚は中々釣れなかった。つまり日が落ちる頃、光る玉がようやく魚の目に付くのだと父は説明した。まるで父は魚の行動の見えないモノを、見たかのように自信を持って言うのだ。

果してそうだろうか。魚が捕食する獲物に、光る物がこの川の中のどこにあるのだろうか。魚が毛鉤に食いつく時、水しぶきを上げるのは良くあることで私は何度も見た。すると、竿にビンと心地良い手ごたえがくる。その一連の魚のアタリを思うと、魚は川面に浮かぶ物を捕食しているように思える。私ができることを父に説明すれば『屁理屈言うな』と機嫌を悪くするからしない。やはり、父と同じで私にも見えないモノは見えないのだから屁理屈は言わなかった。

次第に魚は何を捕食しているのだろうかという気になって仕方がない。自然に強い疑問を持つと、すぐ私は見境なく夢中になってしまうのだ。その頃、学校でカエルの解剖を勉強したばかりで何でも解剖して知りたいと思っていた。だから釣った魚の胃袋をせっせと開いては、何があるのだろうか。何を好んで食べるのかと解剖を繰り返した。ある時、サイズの大きな魚の胃の中にカゲロウの羽があるのをはつきり確認した。

『これだ！』

夕日が沈んで茜色に染めだすと、川面にカゲロウかトビケラかが踊るように舞っている。昼の明るい時には少ない光景だ。川面に映る夕日が煌めくからなのか、あちこちからカゲロウが寄ってきて水面近くで踊っている。波立つ川面に落ちるものもいるだろう。きっと魚達は、落ちたカゲロウを捕食するのだと思った。

それから私のものづくりだ。私の楽しい実証試験なのだ。

あの毛鉤にカゲロウに似せた羽を付ければどうか。光る玉などいらぬ。カゲロウに似せた毛鉤が大事で他はどうでもいい、そう考えているんな形の毛鉤を作った。

蟬やトンボの羽にニカワを溶いて何度も重ね塗りしたり、羽を重ね貼りしたり、寒冷紗を挿んだり、蠟をたらしたりした。そして、カゲロウやトビケラのサイズに羽を切り分けると、細いテグスにセメダインで接着し毛鉤に付け足して作った。もちろん、すぐに最良

の方法が思い付いた訳ではない。川の流れに羽は何度も壊れてうまくいかなかった。偶然だがニカワや寒冷紗を使うことを知って丈夫な羽を作ることができた。そして、幾つかカゲロウそっくりに仕上がると、私は嬉しくてそれを弟に見せて自慢した。

早速、弟と弟の友達の数君も連れて、テンカラ釣りの人達が来ない昼間に掛けて釣りはじめた。すると、面白いように魚が釣れる。それも、バカハヤではなくヤマメやニジマスなど父が釣ろうとしても釣れなかった魚ばかりだ。

弟にもやらせたら、

「兄ちゃん、大変だー・・」ヤマメの大物が掛かって、大騒ぎした。

帰って父にその日の釣果を見せると、目を丸くして驚いていたのを憶えている。

昭和38年頃の片田舎のことだから、毛鉤の専門図鑑も資料も何もないその時期に、今流行りの疑似虫毛鉤を私は何も見ずに自己流で作っていたのだ。

小学4年の頃、凧揚げの凧は駄菓子屋で売っているもので、大抵子供はそれを買って揚げていた。私は奴凧の絵とか歌舞伎役者の絵とか、その毒々しいデザインが嫌いだった。だから自分で凧を作ろうと試行錯誤した。鳶がゆうゆうと飛ぶ姿や青サギが滑空する形に似せて凧を作った。理想の形が決まるまでは、折り紙レベルの紙飛行機くらいのサイズにしてあれこれ折り方を替えたり罅を入れたりして作った。形が決まれば竹ひごを入れて必ず飛翔実験をして優劣を決める。最後に残ったものが全く偶然だが、今というカイトのようなシンプルでスマートな形だった。当時はまだカイトなどない時代だったし、やはり東北の会津では新技術の情報など入るわけなどないから、カイト凧の発明は、今でも私が最初だと勝手に自負している。

ただ私の凧は、それだけで満足した訳ではない。更に音を出すために、ホイッスルに似た形の豆瓢箪を加工すると、それを仕込んで鳶のように鳴く音を再現しようとした。出来上がった笛は勢いよく凧が揚がる時だけ音が小さくヒョローと鳴いた。しかし、いくら工夫してもすぐ鳴き止んで長くは響かないのだ。それでも右に左にすばしくく旋回する時には僅かに低く鳴くこともあった。笛は風の取り入れ口と抜き口にずい分骨を折って何度も作り直した。私は納得いかずに失敗を繰り返していたが、他に興味が移ってしまうとその執着もいつの間にか消えてしまう。その頃は、僅かでも音が鳴れば程々に納得していた。とにかく私は、あれもやりたい。これも知りたい。と、一ヶ所に留まるのが嫌で、一つのものにこだわる時間が勿体ないと思っていたのだ。見知らぬ世界があるのなら、その全て

を見たいし全てを知りたいと思っていたのかもしれない。

それを親や学校の教師達は、私のことを熱しやすく冷めやすい性格で結果を早く求め過ぎる。辛抱が足りないのだと言った。私の変化に富んだ応用能力を認めようとはしないで、辛抱が足りない、飽きっぽい性格だと悪評価するのは大人達で、子供達の間での評価とは、まるで違っていた。

「兄ちゃんは、すごいべー」

大いに友達に自慢する弟は、信頼できる最大の味方だった。弟は農機具で右手中指を落としていたし元々不器用な方で、反応が鈍く、男遊びに混じれない方だった。N君も女子とママゴトするようなその手の仲間だ。二人とも私が可愛がったからではない。素直過ぎて周りの空気も読めないし、好きなものは好き、嫌いなものは嫌いとはつきりしている。私の発明の正しい評価はそうした純粋な彼等以外にないと思っていた。

その年、東京の叔父さんから東京見物に招待された。

叔父さんの勤めるトランジスタ回路を設計する会社は、多分景気が良かったのだろう。私達兄弟二人はもちろんだが父親も東京見物は初めてで、行くと決まった日から大変な騒ぎだった。当時、磐越西線はまだ電車はなく、朝一番のD51の汽車で向かった。煙を吐く汽車は見ることはあっても乗るのは初めてだし、車窓に流れる風景や街並みは変化に富んで実に面白かった。上野に着いてすぐハトバスに乗って名所巡りをした。東京オリンピックを2年後に控えた東京は驚くほど活気に溢れ、あちこちに見える建築現場も世の中の急激な変化を感じさせていた。皇居、霞が関ビル、銀座、羽田空港、そして東京タワーと忙しく名所を巡った。

子供の二人には何を置いても東京タワーだ。展望台に上るエレベーターに並んでいる時、弟は展望台の望遠鏡を早く見たいと言ってはしゃいでいるし、父は土産物などを物色している。

私は近くで焼きそばを作っている屋台をマジマジと見ていた。焼きそばを白い四角い皿に小分けしては人に渡す。傍に大きなゴミ籠があって、食べ終えた皿はその中へ捨てているのだ。私は不思議に思っただけでゴミ籠の皿を手にとって見た。それは、私にとって初めて見る発泡スチレンだった。軽い、羽のように軽い。しかも厚みがあって丈夫だ。私は夢中になって皿を拾ってリュックに詰め込んでいた。

そして、ガツンと頭を殴られて振り向いたら、父が、

「コラッ！ゴミ漁ってどうすんだ。バカものー」と、赤い顔して怒っている。

「どうも、こうもねえべな。父ちゃん、これ知ってっか？」

「他人が焼きそば食って、捨てた皿だべ。そんなもの、みっともねー。乞食じゃあるめし、恥ずかしからやめろじゃ！」

「んでも、父ちゃん。これ触ってみー・・・」

私はガンとして、捨てるのを拒んだ。他の土産など何にもいらなからと大声で叫んで父を困らした。説得に諦めた父は焼きそば屋に行つて3つ焼きそばを買ってきた。そして、洗い場も聞いてきたらしく、私が拾った汚れた皿を持てるだけ持つて洗い場に3人で行つた。皿を洗うと汚れはきれいに落ちて真っ白だ。

「兄ちゃん、これ何すんだ？」弟も手伝つて聞いた。

「まだ、内緒だべ・・・」

私はこれを何にするか決めてはいない。だけど、これを友達に見せたらきつと驚くに違いない。田舎にはないはずの物だからだ。そして何か面白い形に変えて加工したら何かできると想像すると、自然にニヤケ顔になった。

その顔を父に向けたら、

「バカめらが・・・」と、言つて笑つた。そして3人で一緒に焼きそばを食べた。

私のものづくりの材料としては、最高の東京土産になった。

弟とN君は同じく運動無神経な者だから、野球などには決して声を掛けられない、女子とママゴト遊びに興じる似た者同士だ。

でも、そのN君は村中でも一番のお金持ちで、ある日、弟が・・・

「N君が組立グライダーを買ってもらつたけど、作れねえべ・・・兄ちゃん、作つてやつてけるー」と言いに来た。

5月の節句前、小学校裏の万屋に組み立て式木製グライダーが吊るされたのは、子供達が注目する出来事の一つだった。でも、子ども達の小遣いで買える代物ではなかったから、一月以上も、非日常的な無用の長物と化していた。

「エッ、あのグライダー買ったのけ？」

私もそのグライダーを誰が手にするのか気になって仕方がなかった。だから、弟の提案には、まさかと思ひながら狂喜乱舞した。

「そうか・・・そうかあ、そりやそうだく・・・と、きたかー」

「やったな！兄ちゃん」

グライダー作りは手伝ったというよりも、結局、全部一人で作り上げてしまった。青空に向かって飛ばす白昼夢を見ながら、作ってしまった。

でも、仕上がって見ると何か変だ。図面通り仕上げたつもりなのにどこか完成図と違うように見える。それでグライダーを軽く飛ばしてみたら頭を下げて浮き上がらない。おかしいと思って図面を何度も見て確認した。

「あれ？・・・この組立図面、まちがってネッ？」

組立図面の尾翼が後ろ前を違えていることに気付くと、これは信用ならない図面だと思つて、勝手に自分の考えで組立直しをした。大分マシにはなったが前後左右のバランスが悪い上に全体が重過ぎると思つた。高価なグライダーなのにずい分いい加減な図面だ。それで何もかも信用できなくなった。先端の部分を削って重さを減らしたり、余計な物は皆外した。二階屋根から田んぼに向けて試験飛行させながら、思考錯誤して何とか完成させると、確かに見てくれは立派で飾るにはいいだろう。2人に聞いてみても良く出来ていると言う。しかし、グライダーという実用性に欠けるのでは完成とはいえない。どんなに修正しても滞空時間は短いし、そもそも全体が重過ぎてグライダーにならないのだ。どうにもこうにも納得がいかない。面白くない。

すると、モヤモヤしたものがぶくりと電気が走って、パッと目の前が晴れてくる。

「N君、この図面のまんまじゃ、どんなに工夫しても飛ばねえべ。おらが大改造してもいいなら、やるけど、どうする？・・・」

「兄ちゃん、どうすんの？」と弟が聞くから、焼きそばの白い皿を見せた。

「こいつを使ってみんべ・・・」

一応N君に分解修正の了解を得て、改造計画を話した。グライダーの主翼は1m近くあるからリブが多すぎて重くなること、主翼や尾翼に張る紙質も重いし強さに欠けること、まずこの欠点を直さないと飛ばないと説明した。N君は発泡スチレンを見ても、何も考えられないから皆任せると言った。

まず、木製のリブを全部外して発泡スチレンをそのサイズにカットする。そのまま発泡スチレンをリブに使うとリブの重さは10分の1に減少する。だけど強度が足りない。

紙は軽量にするため極薄の雁皮紙を使い、溶いたニカワを薄めたモノで含浸して翼全体に貼る。図面では片面だけに紙を貼るように描かれているが、飛行試験を観察すると何か風の抵抗がおかしいと思つた。それに、羽田空港を見物した際、本物のグライダーの模型

を見たのを憶えていた。きっとあの模型に似せて、リブを包むように両面に貼れば風切も良くなるだろうと想像した。雁皮紙は繊維が強くて両面貼っても薄くて軽い。

私は書道のM先生から雁皮紙の自慢話を真剣に面白く聞いていた。それで何枚か試し用に戴いていたし、既にその強さも試して納得していた。雁皮紙はニカワで加工すると透明度が増して綺麗だった。乾くとピンと張って密着するからヤマト糊もいらないう。複雑微妙な曲線尾翼でも貼り込み作業は簡単になる。グライダーに重要なことは、風を受ける尾翼がしなやかな強さで耐えられることが条件だ。私はカイト凧で上昇気流の破壊的強さを経験していたから、大きくしなる長い尾翼には靱性強度が重要と考えていた。雁皮紙とニカワの相乗効果は強力な靱性を生んで、私の期待を裏切らなかった。

発泡スチレンで代用したリブも雁皮紙で包んでニカワを塗ることにした。

早速取りかかったが、14個もあるリブを加工するのは手間で時間が掛かった。見本を作って2人にもその作業を手伝うように言うと、嬉しそうに飛び上がってはしゃいだ。

リブ一つできる度、私の前に差し出して検品に声を掛けてくる。

「兄ちゃん、これ、どうだべ？」

「よし！OKだ。うまくなったな」そう褒めると、顔をくしゃくしゃにして笑顔を見せて喜んだ。

「どうだ。ママゴトよつか、おもしろべ？」

「うん。おもしろー！兄ちゃんのように賢くなれんべか」

なんだかんだ、学校から帰ってのグライダー作りは1週間も掛かった。

もうすぐ夏休みだ。雨が上がった朝早く、鶏に餌をやったり卵を集めたりしていたら、磐梯山の麓に掛かった雲はあれよあれよと吹き上がっていった。私は、現れた美しい山裾の方を呆然と眺めていた。グライダーがその上昇気流に乗って雲を追いかけるように飛んでいるのが見える。頭の中にはつきりとそれが映って動けないでいた。

「兄ちゃん、どうだー？」

昨日仕上げたグライダーのニカワの乾きが気になって仕方がないらしい。すぐにN君も顔を出した。

「夜中雨だったからなー、まだダメだべ。今日は天気になりそうだ。日当たりいい廊下に干しておくべよ」

「んじや、学校から帰ったら乾いているべな？」

「ああ、それまでは乾くべさ」

その日の午後、弟達は早々に帰っていて、今か今かと、私が帰るのを待ちきれないといった様子だ。ウロチョロ、ウロチョロしている。それが可愛くて可笑しかった。

「兄ちゃん、すげえぞー。ビックらしくぞー」

そのグライダーのドラツとしていた雁皮紙は、ピンと皺一つなく張って艶々した地肌を見せて実に美しいのだ。鴨居に下げられたグライダーの姿は脱皮して羽を乾かし終わったオニヤンマのようだ。透き通った中に、スチレンのリブが白く並んで見えるのは本当に綺麗だった。弟達はその美しさにうっとりして見惚れている。私が鴨居からグライダーを外して手に取ったら、驚くほど軽い。想像も付かない軽さはやっぱり焼きそばの皿のお陰だ。捨てられた発泡スチレンの効果だ。私の思惑はピツタリはまった。そして、水平にして飛ばすようにすると、手から離れそうに浮き上がった。まるで生まれ変わった生き物だ。

「カッコええー、兄ちゃん、カッコええが」弟とN君はグライダーの真似をして、私の周りを飛び回った。

「よし！屋根から飛ばしてみるべ」

屋根に登って田んぼに向かうと、すっかり晴れ渡った青空に幾本かの筋雲が浮かんでいる。上空には強い風がありそうだ。時々風が気紛れに吹いた。グライダーはその風に反応するかのようになり、強い力で飛び立とうと駄々を捏ねた。

私は、どの向きで、どの風に乗せようか迷って空を見上げた。

「兄ちゃん。こっち、こちーツ」弟達が田んぼの土手に立って手を振っている。

「わかった、わかった。んじゃ、いくぞー・ソレーツ！」

二人に向かって投げたグライダーは、松の木を抜けると風に煽られ旋回しながら、ググーンと浮き上がった。そして、一旦、空中で止まるかと思うと、凄いスピードで滑空して行く。

「ウワーツ、カッコええー、カッコええー・・・」

弟達は叫んで、グライダーを追いかけて走った。一枚の田んぼをゆうゆうと越して、その白い大サギは羽を広げたまま田んぼの中に姿を消した。

弟達が、グライダーを探しに稲をかき分けて田んぼに入ったら、小屋から見ていた父が、

「コラーツ・・・バカめらーツ」と言って飛び出して来た。

当然、私が代表で頭を小突かれ叱られた。こんなところで飛ばしたら田んぼの稲が倒れるだろうし、他人の田んぼを壊したら大変なことになると説教された。でも、私は嬉しく

て仕方がない。いつものようにニヤニヤして父の顔を覗いた。

「父ちゃんも、見たべ?・・・」

「・・・」

「・・・カッコ良く、飛んだべな?」

「ん?・・・まあ、うまいこと飛んだな」

「父ちゃんに、頼みがあんべ・・・」

紙飛行機は、最初に父から教わったものだ。父もこうしたものが好なのを私は知っている。だから、このグライダーを飛ばすのを手伝って欲しいと頼んだ。田んぼの無い広い場所は、大川の土手しかこの辺ではなかったし、父のスクーターに紐をつないで本格的にグライダーを飛ばしてみたいと話した。

父は毛鉤のこともカイト凧も知っていたし、私のものづくりを褒めはしないが、まんざらでもないと思っているはずだ。私達が作ったグライダーを手にとって、マジマジと見ていた。父も、内心面白そうだと思っている。

「んじゃ・・・夏休みになったら、行くべか?」と、もったいぶるように言った。

「やったー、兄ちゃん、N君、楽しみだなー」

夏休みになって、大川に皆で行った。弟達が周りの子供に話したのだろう。村の子供達もいつの間にか大勢集まって来た。何故か、父の釣り仲間も来ている。釣りをしないN君の父親もいた。

先ず、父と打合せをしてスタートさせる練習をした。父がスクーターに乗ってスタンバイすると、私は5mの長さの紐だけ持ってピンと張った。父の合図でスクーターが走り出す、私も紐を持ったまま走り出す、もうスクーターに付いていけないスピードになった頃、一声出して紐を放す。それを何回か練習して本番に備えた。

「いいか、本番、行くぞ」スクーターがエンジンを大きくふかした。

私は、もう走れないところまで走ると、

「父ちゃん、放すぞー」空に鳥を放つように、グライダーを放した。

「あいよ!」

父はハイスピードで飛ばすと、頃合いを見てブレーキを掛けた。グライダーは、上昇して紐から外れるとグリーンと翼をしながら高く舞い上がった。上空の風でクルツと旋回して川の方へ向きを変えた。そのまま滑空して川の方へ飛んで行く。

「アーツ、そっち行っちゃダメだ・・・」誰かが叫ぶ。

子供達は皆、土手を駆け下りて追いかけた。グライダーは川の流れの上に来ると、上昇気流があるのか、又、グンと舞い上がって飛んだ。その滞空時間は驚くほど長く、川を越えて遠くの田んぼの中に消えてしまった。

カッコええー、カッコええーと、子供達は囁し立てて大騒ぎだ。

「いやー、飛んだなー、父ちゃん・・・」

「ああ・・・飛び過ぎだあ・・・」父は、田んぼの方を見て情けなく言った。

「なあーに・・・おら達が取りに行くべき。父ちゃん達は先に帰ればいいべ」

「んだか？・・・んじゃ、よろしくな」

父の困った顔が可笑しかった。

私はグライダーが浮き上がって旋回する主翼の美しいしなりを見た。獲物を狙うかのよう滑空する羽を見た。グーンッと、伸びのある滑空とスピードに鳥肌を立てた。そして、見えない風の流れが翼のしなりによって見えた気がした。否、見たいと思うようになった。見えない空気の流れと翼の関係を流体力学というの知らずに、それを知りたいと思うようになった。見えないモノは確かにあった。それが私の見えないモノを見た最初だった。そして、見えないモノに憧れた最初だったかもしれない。

私の身近にいる生き物や植物や、川や山や空の雲は、取り立てて特別なものではない。だから観察をするために観察をするというのはまるで違う。単にそれらを見ているのが楽しかっただけで、時々思わぬ動きを見せることがあると、その不思議さに感動を覚えて楽しんでいただけだ。だけど、その不思議さは、私にいろいろ教えてくれる先生でもあったのだ。

水を満々と張った田んぼの土手に佇むと、タガメがメダカを狙ってノツソリとかまえている。さあ、そろそろ来るなと思うとタガメは凄惨な反射神経でメダカに襲い掛かる・・・残念、取り逃がしたタガメのソロッとした姿が可笑しい。縁側でオニヤンマが行ったり来たりしている・・・何をしているのかと思う。糸を引くように真つすぐ飛んで、ピタッと止まる。その見事なホバリングに感動して、捕まえては美しい羽を拡大鏡で見てやろうとする。オニヤンマはその秘密を見られまいと、私の指を噛む・・・恐ろしく強いアゴの力に驚ろかされると、再びその不思議さを感じるのだ。

父がドジョウをたくさん獲ってきて、裏庭にある井戸の水を汲んで桶にさわしている。食べるために3日ほど泥を吐かすためだ。私が覗くとドジョウは桶の底に隠れるが、長く

我慢できずに水面に顔を出す。それを何度も繰り返すのはエラ呼吸だけでは足りなくて、肺呼吸のようにポカッと口を開けて呼吸をするのだろう。稲刈りを終えた田んぼには水は無い。しかし、湿った場所の土を掘るとドジョウがニョロニョロと出てくる。ドジョウは水のない土の中でも生きることができる。後に、それが腸呼吸するということがわかった不思議の一つだ。

日が沈みかけた群青色の空に星が光り出すと、杉や松の原木の黒いシルエットの何処かで虫やカエルや野鳩が鳴いた。夕間暮れの空に舞う虫を、コウモリが捕食しようと変幻自在に飛び回っている。近所の友達がそのコウモリを捕まえに行こうと呼びに来る。私達は背丈の2倍以上もある竹棒を担いで田んぼの畦道に乱舞するコウモリにそっと近付いた。そして、その長い竹棒を勢いよく振り回す。何故かコウモリは竹棒にぶつかってバタッと落ちた。コウモリは見えない波長で獲物を探していて、フラフラする竹棒を獲物と勘違いして飛びつくのだ。

自然の見えないモノはそれだけではない。四方を山に囲われた会津では、天候が思わぬ急変を見せる。長くこの地に生きる人達は山や雲や風を読んで、その急変する天候を予測した。祖先から続く経験を元に、見えないモノを見ようと探究した観察記憶の結果だ。それは公示のものより正しいことの方が多かった。

私は見えないモノの正体を暴きたいと、増々夢中になっていった。時々現れる虹さえ捕まえたいと思っていた。ところがある事件をきっかけに、私のものづくりへの興味は、突然失ってしまったのだ。

裏庭の池は、イモや野菜を洗ったり野良着を洗ったりする池で、その池の水は柵外の田んぼに流れている。私が大川で釣った魚も食わずにこの池に放していた。だからいろんな種類の魚が潜んでいるはずだ。また、洗い場の平たい石の裏にはナマズもいるし、カワニナがべったり着いているのも見える。だから、時期が来ると蛍も湧くように光った。

ある日、裏庭の方から生臭い嫌な臭いが漂ってきた。池の魚が無数に浮かんで死んでいるのだ。裏庭の池だけではなかった。田んぼに水を引き込む関のたまりには、大量の魚や虫が浮かんで水面を覆い尽くしていた。畦道に舞うはずの羽虫も飛ばない。生き物の鳴き声も何も聞こえない。シンと静まり返った恐ろしい光景だった。その年から、蛍はまったく光らない、オニヤンマも何処かへ去ってしまった。サギの姿も見えなくなった。

ヘリコプターによる農薬散布がすべての原因だ。それは、ほんの一日の出来事で、私の

愛するものごとごとく奪い去った。その悔しさを言葉に表すこともできない。どんな抵抗もできなかった。

どうにもならない虚しさは、吐き気を伴って私を襲った。それも、たった一日の出来事で、私の大事な先生達を奪っていったのだ。

それが、見えないモノの怖さを経験した、私の最初の出来事でもある。